

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の
英語教育プログラム

深 谷 晃 彦

The English Language Program
in the Faculty of International Communication
at Gunma Prefectural Women's University:
A Case Study

Teruhiko FUKAYA

群馬県立女子大学紀要 第34号 別刷

2013年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 34

FEBRUARY 2013

JAPAN

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の 英語教育プログラム*

深 谷 晃 彦

The English Language Program
in the Faculty of International Communication
at Gunma Prefectural Women's University:
A Case Study

Teruhiko FUKAYA

1. はじめに

2005年に新設された群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部は、「実践的な英語力、高度なコミュニケーション能力並びに国際社会で自立して活躍するために必要な知識及びリーダーシップを備えた人材を育成することを目的」（「群馬県立女子大学学則」第2条の3より）とし、その大きな柱となる実践的な英語力の養成においては、学部設立当初から様々な試みを行ってきている。また、2006年度からは、学生全員に卒業までに TOEIC[®] で730点以上を取得させることを学部の目標に掲げているが、その試みも一定の成果をあげつつある。

本稿では、群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部における英語教育プログラムの現状とその成果を概観する。まず2節では、本学部の英語カリキュラムの全体像を示した後、各指導分野の概要ならびに各種の取り組みについてまとめる。3節では、過去3年間(2009年度から2011年度)の卒業生の TOEIC IP テストのスコアを用いて本学部生の英語力を分析する。4節では、現行プログラムの課題について考察する。

2. 国際コミュニケーション学部の英語教育プログラム

2.1 背景と全体像

国際コミュニケーション学部では設立当初から、多岐にわたる英語の科目を用意して英語教育にあたっていたが、その多彩さゆえ、カリキュラム全体の統一性・体系性に欠くことが当初より教員の間で指摘されていた。また、学生からも「いろいろな英語科目があつて楽しいが自分の英語力が伸びている実感が持てない」などの意見も聞こえていた。多様な科目が、科目間の連携があまり取

*本稿で報告している本学部の英語教育プログラムは、本学部英語コミュニケーション課程での議論の積み重ねの結果、現在の形に収束しているものである。現在および過去の英語コミュニケーション課程所属教員、特にカリキュラム検討の初期段階から現在の運営に至るまで大きな役割を果たしてきている細井洋伸氏と Mark R. Freiermuth 氏に感謝の意を表したい。また、このプログラムの実現にご協力いただいた本学外国語教育研究所とその研究員にも感謝したい。なお、本稿の3節では、故今井直次郎前学長／国際コミュニケーション学部元教授が整理されたデータも一部加工して使用させていただいた。あわせて感謝の意を表したい。

れていない状態で提供される英語カリキュラムは、英語力が安定しているレベルにおいては効果があると思われるが、本学部のほとんどの1・2年生のように、高校までに培った基礎力の定着と発展を図るべき段階にある学生においては、どの科目の内容も中途半端に終わってしまう危険性がある。以上のようなことから本学部では、1・2年生の英語カリキュラムにおいて、リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングの4技能分野の科目をバランスよく配当し、また科目間の連続性と体系性を意識した統合的アプローチを採用することにした。

具体的には、Brinton, Snow, and Wesche(1989)によって提唱された Content-Based Instruction (CBI、内容中心の指導法。Brinton and Master (1997)、Kasper (1999)なども参照)のモデルの一つである Theme-Based Instruction(テーマ中心の指導法、Brinton, Snow and Wesche(1989: Chapter 3))を、本学部の状況に合うような形でアレンジして採用することとした。¹ これは、リーディングとリスニングのインプット分野を軸として教材のテーマを一定期間統一し、その他の分野でもなるべくそのテーマに沿うような形で課題設定等を行うという形態である。

本学部のカリキュラムの全体像を表1に示す。

表1 国際コミュニケーション学部の英語カリキュラム全体像

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
言語知識	英文法の基礎	英語のしくみ						
文法	文法I	文法II	文法III					
発音	英語発音の基礎	英語の発音						
スピーキング	双方向	I P コミュニケーション I	I P コミュニケーション II	ディベート&ディスカッション I	ディベート&ディスカッション II	上級ディベート&ディスカッション		
	片方向			プレゼンテーション I	プレゼンテーション II			
リスニング	リスニング I	リスニング II	リスニング III	リスニング IV				
リーディング	リーディング I	リーディング II	リーディング III	リーディング IV				
ライティング	パラグラフ・ライティング I	パラグラフ・ライティング II	エッセー・ライティング I	エッセー・ライティング II	上級ライティング			
TOEIC	TOEIC 演習 I	TOEIC 演習 II	TOEIC 演習 III	TOEIC 演習 IV	TOEIC 演習 V	TOEIC 演習 VI	TOEIC 自律学習	TOEIC 自律学習
TOEFL	TOEFL 準備講座 I	TOEFL 準備講座 II						
上級スキル	会話体				ドラマの英語 I	ドラマの英語 II		
	正式				メディアの英語 I	メディアの英語 II		
	その他				観光英語演習	上級 I P コミュニケーション	ビジネス英語	上級英語 I 上級英語 II
選抜クラス	<前期> H P リーディング I・II H P ビジネスライティング I・II				<後期> H P リスニング I・II H P ジャーナリズム英語 I・II			

※網掛けなしは必修科目、網掛けありは選択科目を表す。

1 新しいカリキュラムの導入に向けて、Content-Based Instruction の提唱者の一人である UCLA の Donna M. Brinton 氏を本学に招聘し (2006年9月1日、4日、5日)、CBI の考え方や実践法などについて教員を対象としたワークショップを開催した。

本学部では表1の左端に記した各分野をトラックと呼んでいる。カリキュラムのコアとなる1・2年生の必修科目として、リーディング・リスニング・スピーキング・ライティングの4つのトラックの科目を設けている他、文法と発音も独立したトラックとして複数科目を用意している。さらに言語知識トラックとして、英語という言語のしくみを意識化させる意図で言語学系の科目も設けている。

少人数制（2.4節参照）のため、非常勤講師を含む多くの教員でこのような科目を担当していることから、必修科目においては教育内容の統一性を維持するために共通教材を使用している。リーディングとリスニングのトラックでは、テーマ中心のカリキュラムの軸とするため、主としてアメリカの大学付属語学学校などのESLプログラム（英語を母語としない学生を対象とした英語プログラム）で使用されているテーマベースの教材を採用している。²

また、それぞれのトラックにおける科目間の連続性・体系性を確保するために、専任教員がトラック・コーディネーターとして主要なトラックを担当し、教材選択を行ったり、指導方針・内容を固めたりしている。また、トラック・コーディネーターは科目担当教員の意見も随時取り入れ、指導内容の改善を図っている。

以上のようなカリキュラム全体のシステム化により、各トラックにおける体系性とトラック間の関連性を確保し、学生たちが必修科目の履修を通して、英語力が伸びていることを実感できるようなカリキュラムを目指している。なお、主として3年生以上が対象の上級スキル科目はすべて選択科目であるため、大まかな方針は立てるものの、細かい内容に関しては各担当者に任せている。

2.2 テーマ中心のカリキュラム

本学部のテーマ中心のカリキュラムの軸をなすのは、リーディング・トラックとリスニング・トラックである。たとえば2012年度では、表2のようなテーマで授業を行っている。

表2 2012年度の主なテーマ

年次	レベル	前 期	後 期
1年次	上 級	teamwork and competition, gender and relationships, health and leisure, etc.	technology, money, creativity, etc.
	中 級	advertising, fraud, extreme sports, language, etc.	storytelling, marriage, climate change, punishment, etc.
	初 級	school life, nature, community, etc.	home, world culture, health, entertainment and media, etc.
2年次	上 級	language and learning, gender and relationships, aesthetics, mind, etc.	working, art and entertainment, conflict and reconciliation, etc.
	中 級	media, overcoming obstacles, medicine, animal intelligence, etc.	longevity, philanthropy, education, food, etc.
	初 級	education, city life, business, professions, etc.	lifestyles, language and communication, tastes and preferences, etc.

それぞれのレベルにおいて学生たちは、表2に示したようなテーマに基づいたリーディングとリスニングの教材に同時期に取り組むことになる。また、各テーマは3週間程度で完結するようにしている。このようなテーマ中心のカリキュラムでは、一定期間に同じテーマで文章を読み、音声を

² 2012年度は、*Mosaic 1 & 2*、*Interactions 1 & 2*（以上、McGraw Hill）、*NorthStar 3 & 4*（Pearson/Longman）を採用している。なお、次節の表2はこれらの教科書の内容に基づく。

聞くことになるため、各テーマに関する背景知識が蓄積して理解度が高まるとともに、言語的にも関連性の高い語彙や表現に触れることになり、言語知識も定着しやすいという特徴がある。なお、表2のテーマから明らかなように、これらの科目は日常会話的な英語の習得を目標としているのではなく、英語で大学レベルの授業についていけるようになるための academic English の習得を目標としている。

リーディングとリスニングのみならず、他の技能領域の授業も同時進行的に同じテーマで進められるのが理想的であるが、2.4節で述べるように本学部においては、リーディングとリスニングでは学年を4分割し、スピーキングやライティングでは6分割するというクラス編成を採用しているため、学生のグループが完全には一致せず、理想的な形でテーマ中心のカリキュラムが進められない。リーディングとリスニング以外の技能領域の担当者には、ミーティング等を通じて学生たちが学んでいるテーマを伝達し、なるべくそのテーマに沿ったトピックを採用してもらうように呼びかけている。このような形態をとるため、本学部の英語カリキュラムは、『『緩やかな』テーマ中心のカリキュラム』と呼ぶことができよう。

2.3 各トラックの概要

前節では主として、本学部のテーマ中心のカリキュラムの軸となるリーディングとリスニングの2つのトラックについて述べたが、本節ではその他のトラックについて概要をまとめる。表1で示したように、1・2年生の英語科目にはこれら2つのトラック以外に、スピーキング、ライティング、発音、文法、言語知識、TOEIC、TOEFL のトラックを設けている。

スピーキング・トラックでは、双方向型の言語活動を中心とする「IP (=Interpersonal) コミュニケーション」や「ディベート&ディスカッション」を、また片方向型の言語活動を中心とする「プレゼンテーション」を設けている。「IP コミュニケーション」においては、多岐にわたる話題に関して英語でディスカッションすることにより、英語のスピーキング力・リスニング力の基礎を養う。また、「ディベート&ディスカッション」では、英語によるディベートの形態を学び、「IP コミュニケーション」で培った英語運用能力をさらに発展させて、共通テーマに沿ったものを含む様々なトピックで賛成側・反対側に分かれてディベートを行う。「プレゼンテーション」では、将来の夢、お勧めの場所などのような個人的な話題だけでなく、書籍やインターネットなどでの調査に基づくアカデミックな内容のプレゼンテーションも行う。

ライティング・トラックでは、1年次に、トピック・センテンスやそれをサポートする文の書き方、文と文のつなぎ方など基本的なパラグラフの構成法を学び、意見を述べるパラグラフ、原因・結果のパラグラフ、比較・対照のパラグラフなどの書き方を、実際に自分でパラグラフを書きながら学んでいく。2年次では、パラグラフについて学んだことを数パラグラフからなるエッセーに発展させ、比較、原因・結果、議論のエッセーなどを実際に書いていきながら、アカデミック・ライティングの力をつけていく。なお、スピーキング・トラックやライティング・トラックにおいても、テーマ中心のカリキュラムの考え方に則り、リーディングやリスニングで使用しているテーマも取り入れるようにしている。

以上はテーマ中心カリキュラムに沿ったトラックだが、それ以外にも独立したトラックとして発音、文法、言語知識、TOEIC、TOEFL のトラックを設けている。

発音トラックでは、1年前期に国際音標文字 (International Phonetic Alphabet (IPA)。The International Phonetic Association (1999) 参照) に基づいた英語の発音記号が正確に発音できるようにトレーニングする。さらに英語のストレス、強弱リズム、イントネーションの基礎を学ぶことにより、より正確で通じやすい英語の発音法を学ぶ。後期では、前期に学んだことをより多くの

実例を用いてトレーニングするのに加えて、CALL 教室において English Central³ などのウェブサイトを活用しながら、スピーチや映画のセリフなどを用いて、より実践的な発音訓練を行う。

学生たちは中学校・高等学校で英文法をかなり学習してきてはいるが、知識として持っているが、実際にそれを運用するとなると、うまく実践できない学生が多いのが実情である。グラマー・トラックでは、中学・高校で学んだ文法事項を用いて英語を話すコミュニカティブな活動をペアやグループで行い、文法知識をコミュニケーションの中で自由に運用できるようになるまで高めることを目的としている。

大学英語教育の初期段階で言語学的な知識を導入しているのは、言語学専門の教員が多い本学部の英語教育プログラムの特徴と言えよう。言語知識トラックでは、まず「英文法の基礎」で、高校までに学習している英文法項目のうち特に重要となる事項、あるいはこれまであまり深く学んでいない事項、たとえば、時制、相、冠詞、条件節、否定などについて、英文法・語法研究や言語学研究から得られた知見（柏野（2010）、久野・高見（2004, 2007）、大西・マクベイ（2005, 2006）、Swan（2005）など）や、英語ネイティブスピーカー教員の指摘（ピーターセン（1988）、ミントン（1999）など）を取り入れながら復習していく。グラマー・トラックでは、英文法知識の運用という側面を伸ばすことを目的としているが、「英文法の基礎」では、それぞれの文法事項に関して、なぜそうなるのかという説明に焦点を当て、英文法の理屈が身につくようにしている。また「英語のしくみ」では、さらに言語学的内容に踏み込んで、音声学・音韻論、形態論、統語論、語用論、社会言語学などの言語学の諸分野の基礎を概観し、浅いながらも英語という言語を客観的に観察・分析することを学ぶ。⁴

TOEIC トラックでは、主に TOEIC の問題形式に慣れるための演習を行っているが、特に 1 年次には、CALL 教室にインストールされているアルク社の NetAcademy 2 というシステム内にある「スーパースタンドコース」などの教材を用いて、ディクテーションやシャドーイングなど総合的な英語力を伸ばすためのトレーニングも併せて行うようにしている。

TOEFL トラックでは、TOEFL の受験準備のための科目を用意している。

主として 3 年生以上に選択科目として提供されている上級スキル科目には、映画やドラマ、ニューメディアなどから採った生の教材を使って、より高度な英語力を身につけることのできる科目や、実際に社会で起こったこと・起こりうることを基に英語でシミュレーションすることで、実践的な英語運用能力を高める科目、観光業界や様々なビジネスシーンで使用する英語を学ぶ科目、日英間の翻訳を英語ネイティブスピーカーの現役翻訳者から学ぶ科目などがあり、1・2 年次の必修科目で身につけた英語力をさらに発展させることができるようになっている。

なお、TOEIC トラックや言語知識トラックの科目以外では、英語ネイティブスピーカーの教員が授業を担当している科目が多く、その比率は科目全体の 70～80% 程度となっている。

2.4 クラス編成

言語知識トラックの科目のように、主として講義形式で行われる科目では比較的大人数で授業を

3 URL は <http://ja.englishcentral.com/>。

4 なお、このような言語知識に関する授業が行われる 1 年次では、本学部の 2 課程（英語コミュニケーション課程と国際ビジネス課程）への振り分けがまだ行われていないため、2 年次以降英語コミュニケーション課程に進むような言語学に興味を持っている学生だけでなく、国際ビジネス課程に進む政治・経済やビジネスなどに関心の中心がある学生も、言語知識に関する授業を履修することになっている。

行っているが、英語の運用能力を高めるための科目においては、より効率的な教育を行うため少人数制を採用している。文法、リーディング、リスニングなどの科目は学年を4分割して、1クラス18名から20名程度のサイズで行い、また、スピーキングの授業のように個々の学生に話す機会をより多く与えたい科目や、ライティングの授業のように教員のきめ細かな添削指導が必要な科目に関しては、学年を6分割して、1クラス12名前後のサイズにしている。

学生集団に多様性を持たせるために様々なタイプの入試を実施していることもあり、入学当初から学生の英語力にはばらつきがある。そこで、それぞれの学生に合ったレベルの授業を提供するため、各学期に TOEIC IP テストを実施してプレースメントを行い、上記のクラスを習熟度別に編成している。

2.5 英語自律学習

英語の習得のためには、授業のための学習に加えて自主的に学ぶ努力も必要である。そのため本学部では、自ら計画を立てて学習を進めることを目的とした「自律学習」という科目群の中に、「英語リスニング自律学習」や「英語リーディング自律学習」などの科目を設けている。⁵

「英語リスニング自律学習」では、アルク社の NetAcademy 2 内の「スタンダードコース」などの教材を用いて、学生に自律的に学習計画を立てて学習させ、その学習時間に応じて単位を付与している。

「英語リーディング自律学習」では、酒井 (2002)、酒井・神田 (2005)、古川 (2010)、「SSS 英語学習法」⁶ などで提唱されている、易しい英語で書かれた本から始める多読学習を採用している。Penguin, Oxford University Press, Cambridge University Press, Macmillan, IBC などから出版されている Graded Readers と呼ばれるレベル別になった多読用書籍を図書館に用意し、学生は自分で立てた計画によりそれらの書籍を読み進めて記録を付けていく。1分間に110語以上のスピードで読むことを目標とし、20万語読むごとに単位を付与している。

2.6 伸び悩む学生へのフォローアップ

本学部では様々なタイプの学生を受け入れているため、英語が必ずしも得意ではない学生も入学してきている。英語の習得に強い意欲を持っていることを入学時に求めているため、各自の努力に任せることを基本としているが、中には学習スキルが確立できていないために、努力しているにもかかわらず英語力が伸びない学生がいるのも事実である。2.4節で述べたとおり、学期ごとに TOEIC IP テストを実施しているが、その結果を毎学期、英語コミュニケーション課程の教員で検討して、スコアが低く伸びも思わしくないために、そのままでは学習意欲に影響が出そうな学生を選び出し、専任教員がマンツーマンで指導することになっている。

原則として1年後期から2年前期までの間を指導期間として、350点以下の学生は指導を必須とし、355点から400点の間の学生はスコアの推移や授業中の様子などを見て、必要に応じて指導することになっている。該当する学生と担当教員がまず面談を行い、どのような分野に苦手意識があるかなどを話し合っただけでその学生に適切な教材を選択し、本人が教員と相談の上、主体的に学習計画を立てる。本学部の学生の傾向としてそのような学生は、文法の基礎が定着していないケースや、英語に触れる量が足りないケースが多いため、主として文法と、音読練習を含むリーディングに取り組

5 この2つの英語自律学習科目の他に、次節で触れる「英語基礎自律学習」や、英語が得意な学生が他の学生のチューターとなって指導する「ピアメンター自律学習」などがある。

6 <http://www.seg.co.jp/sss/> 参照。

むことが多い。学生は通常、1、2学期間の指導で自立して学習できるようになっていく。なお、この指導は、「英語基礎自律学習」として学習時間に応じて単位を認定している。

2.7 上級者のための選抜プログラム

2.6節で述べたケースとは逆に、帰国子女や長期留学経験者など、入学時に既にかなり高い英語力を持っている学生もいる。そのような学生から、上で概観した科目群よりもさらに高度な内容の科目の設置を望む声が上がってきたため、2010年度後期より上級者を対象とした Honors English Program (以下、HP) という選抜プログラムをスタートした。HP には、「HP リーディング」、「HP リスニング」、「HP ビジネスライティング」、「HP ジャーナリズム英語」の4科目があり、それぞれ2回ずつ履修できるようになっている。HP に参加するためには、TOEIC で800点以上を取得する必要がある。この要件を満たしていれば学年は問わず、1年次より履修することも可能である。またプログラムの趣旨から、それぞれの科目は15名を定員として、それを越える希望者が出た場合には選抜を行うこととしている。

「HP リーディング」では、社説や論説文などのより高度な文章のメイン・アイデアや議論の論理構造などを掴んで、著者の意図を正確にとらえる力の養成を目標としている。「HP リスニング」では、英米で放送されているニュース番組など、英語ネイティブスピーカーをターゲットとした素材を用いて、ある程度まとまった分量を聞き、メイン・アイデアおよび細部を正しく把握して、それを日本語でわかりやすく説明する力の養成をめざしている。「HP ビジネスライティング」と「HP ジャーナリズム英語」は、英文ライティングの精度を高めることを目標とし、前者ではビジネスで必要となる様々な文書の書き方を、後者ではニュースレポートの書き方を中心に学ぶ。

2.8 夏季集中講座

夏季休暇中に STRIPE (Summer Term Rapid Improvement Program of English) という英語集中講座を設けている。この講座は学生の弱点補強を目的としており、現在はリーディング力・語彙力の強化と TOEIC のための演習を行っている。短期留学に行かない学生たちに対して、夏季休暇中も英語学習の機会を提供するという意味合いも持っている。

2.9 海外留学支援プログラム

最後に、国際コミュニケーション学部の英語プログラムの一部ではないが、全学的な取り組みである海外留学支援プログラムについても触れておく。本学では、短期留学(2週間以上6ヶ月未満)と長期留学(6か月以上1年未満)をする学生に対して奨励金を支給している。国際コミュニケーション学部の過去3年間の卒業生の留学に関するデータによると、⁷ 長期、短期を含む留学経験率は学年全体の8割前後、また、長期留学を経験した学生の比率は学年全体の4分の1前後となっている。これらのデータからわかるように、この制度を利用して留学する本学部の学生は多く、学生の英語力の向上に貢献していると考えられる。

3. TOEIC IP テストに見る国際コミュニケーション学部生の英語力

2節では本学部の英語教育プログラムの概要を見てきたが、本節では学期ごとに実施している TOEIC IP テストの結果に基づき、過去3年間の卒業生たちの英語力の状況を分析する。なお以下

7 国際コミュニケーション学部のウェブサイト (<http://www.gpwu.ac.jp/fic/>) 参照。

の分析では、本学部の英語プログラムの成果を見るために、本学部に1年次より4年次まで在籍した学生のデータに絞っている点と、留学などで受験しない学生も出るため、それぞれの時点までの各自のベストスコア（ただし在学中のスコアに限る）で集計している点に注意されたい。

まず、平均点の推移を見てみよう。図1は、それぞれの学年の総合得点平均値の推移を表している。英語カリキュラムのコアとなる必修科目群が終了する2年後期の段階では、2006年度入学生(77名)、2007年度入学生(65名)、2008年度入学生(67名)の平均点はそれぞれ、入学時より191.2点、162.6点、211.2点上昇している。4年間で見てみると、それぞれ入学時より256.0点、221.5点、279.5点と大きく伸びていることがわかる。また、入学当初の平均点を学年間で比較すると、最高と最低で47.1点の差があるが、2年後期の段階ではほぼ同等のレベルに収束し、4年次では最高と最低の差が10.9点に収まっている。

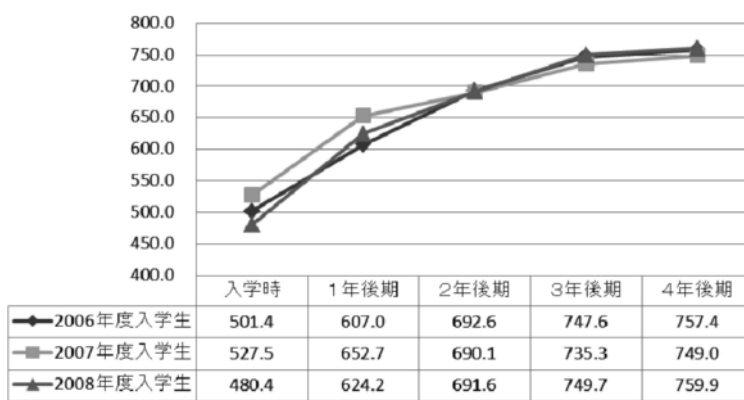


図1 TOEIC 総合得点平均値の推移

同様の傾向は、リスニング・リーディング別の平均値の推移にも現れている。図2はリスニングスコア平均値の推移、図3はリーディングスコア平均値の推移を表す。学年間の比較において、入学時の段階では最高と最低の間にリスニングで43.8点、リーディングで27.5点の差があり、総合得点と同様、学年間にある程度のばらつきがあるが、2年次後期より収束傾向になり、最終的にはリスニングで2.8点、リーディングで8.1点の差に収まっている。

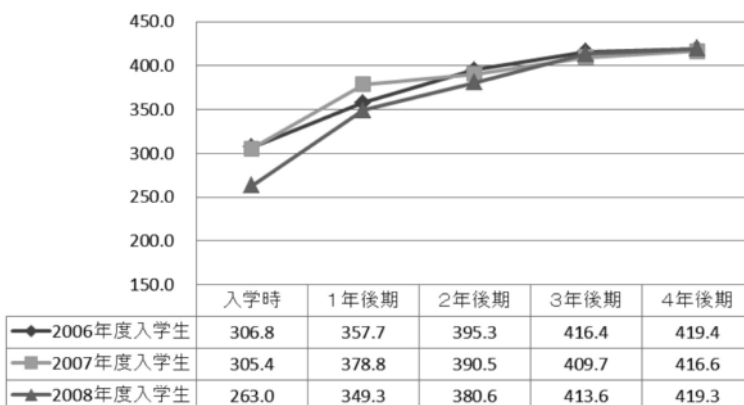


図2 TOEIC のリスニングスコア平均値の推移

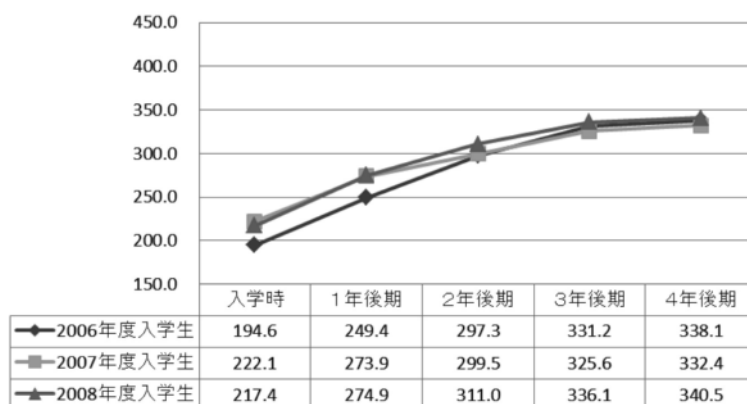


図3 TOEICのリーディングスコア平均値の推移

このように、スタート時点の平均点にある程度の差があるにもかかわらず4年後に一定のレベルに収束しているということは、そのレベル以上に学生を伸ばすことができていないという点で、現行の英語教育プログラムの限界を表しているとも見られる。

また、リスニングとリーディングのスコアを比較すると、4年後期の段階で、各学年ともリーディングのスコアがリスニングのスコアに比べて80点程度低くなっている。ただし、次に見るようにこの傾向は本学部の学生だけの傾向ではない。

国際ビジネスコミュニケーション協会（2012：11）によると、2011年4月から2012年3月までに実施されたTOEIC IPテスト受験者で、語学・文学系（英語専攻）と国際関係学系の学生の平均点は、以下のとおりである。

表3 語学・文学系（英語専攻）の学生のTOEIC IPの平均点

	リスニング	リーディング	合計	受験者数
大学1年生	261	199	460	20,170
大学2年生	290	220	510	14,825
大学3年生	315	240	555	14,635
大学4年生	333	256	589	5,649

表4 国際関係学系の学生のTOEIC IPの平均点

	リスニング	リーディング	合計	受験者数
大学1年生	247	186	433	6,279
大学2年生	272	202	474	3,864
大学3年生	313	240	553	2,978
大学4年生	333	260	593	861

これらのデータは当該年度内にその学年に在籍している学生すべてのスコアの平均点であり、一方、本稿で使用しているデータは当該学年末時点でのベストスコアの平均点であるため、単純な比較はできないが、本学部生の平均点が2年次後期で690点から693点の間、3年次後期で735点から750

点の間、さらに4年次後期で749点から760点の間に到達しており、同時期の語学・文学系（英語専攻）や国際関係学系の学生の平均点より150点から200点程度上回っていることから、本学部での英語教育が一定の成果を上げていると考えてよいと思われる。

さらに、国際ビジネスコミュニケーション協会（2012：6）によると、2011年4月から2012年3月までに実施された TOEIC IP テストの企業・団体受験者で、海外部門に所属しており英語を主言語とする国に滞在経験のある者2,704名の総合得点の平均は738点（リスニング393点、リーディング345点）である。⁸ 本学部の3年後期の平均点がこれとほぼ同程度であることから、本学部の取り組みが成果を上げていると言えるであろう。

次に得点の分布を見てみよう。図4は入学時点、図5は1年後期、図6は2年後期、図7は3年後期、図8は4年後期の総合得点の各得点レンジの人数分布を示している。なお、英語教育プログラム全体としての傾向を見るために、それぞれのグラフでは2006年度から2008年度入学生を合計して表示してある。⁹

平均値の上昇を反映して、毎年、分布の山全体が高スコア方向に移動しているのが分かる。上位グループに目を向けると、入学当初4名（1.9%）しかいなかった800点以上の学生が、1年後期に17名（8.1%）、2年後期に38名（18.2%）、3年後期に68名（32.5%）と着実に増えていき、最終的に4年後期の段階では73名（34.9%）に達していることがわかる。900点以上の学生も、入学時の1名（0.5%）から、4年後期には19名（9%）に増えている。また、学部の目標である730点以上という括りで見ると、入学時にわずか6名（2.9%）であったものが、4年後期には全体の6割以上の135名（64.6%）に増えている。¹⁰

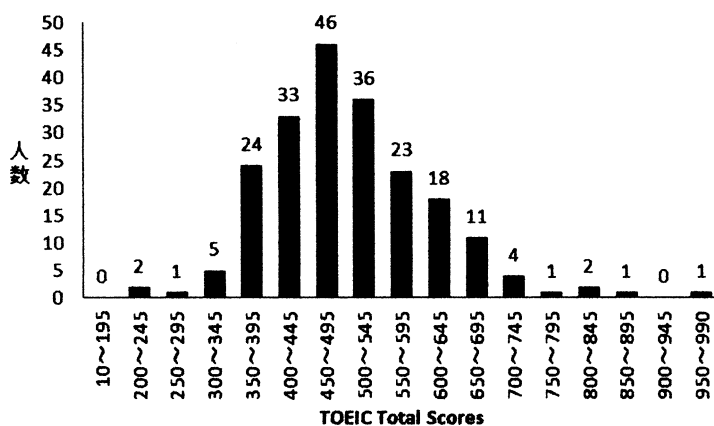


図4 入学時の TOEIC IP 総合得点の分布（2006年度～2008年度入学生）（N=208）

8 小池他（2010：39-40）の調査でも、国際ビジネスの第一線で活躍している日本人6,651名の TOEIC スコアの中央値は700点から750点の間にあると報告されている。これは、本文中で紹介した国際ビジネスコミュニケーション協会（2012：6）の調査結果とほぼ同程度であると考えてよいであろう。

9 2007年度入学生の中に、入学時に TOEIC を受験しなかったものが1名いたため、入学時の合計人数が208名、1年後期以降の合計人数が209名となっている。以下でパーセンテージを示す場合、在学生のうちの何パーセントであるかを示すため、入学時の場合も分母を209名として算出した。

10 図4から図8では730点以上という区切りは表示されていないので、元データから算出した。

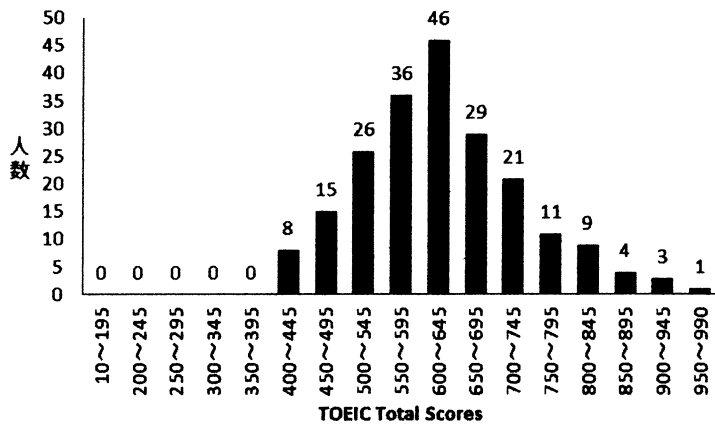


図5 1年後期の TOEIC IP 総合得点の分布 (2006年度~2008年度入学生) (N=209)

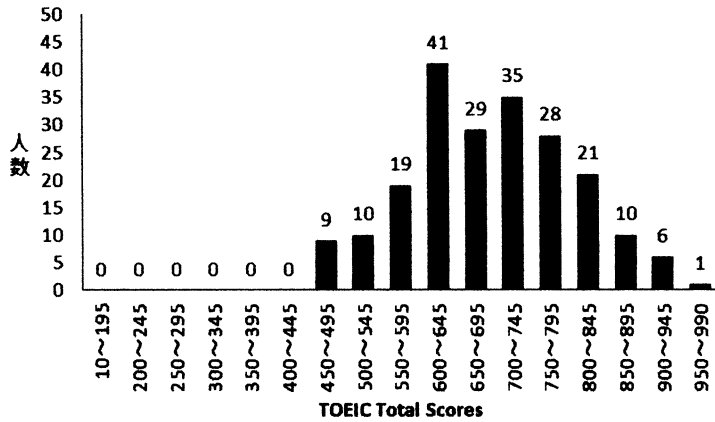


図6 2年後期の総合得点の分布 (2006年度~2008年度入学生) (N=209)

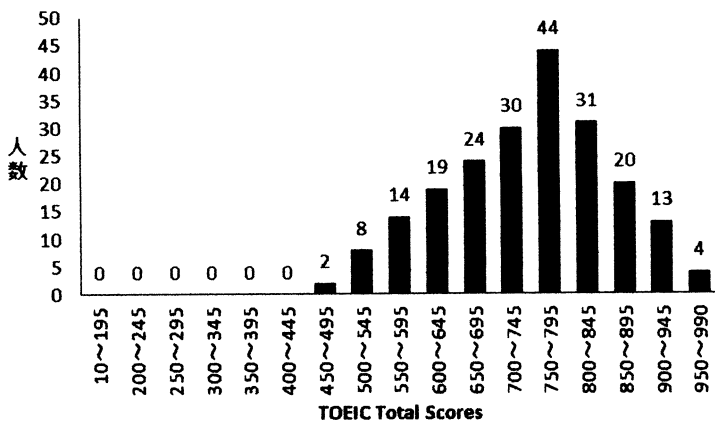


図7 3年後期の TOEIC IP 総合得点の分布 (2006年度~2008年度入学生) (N=209)

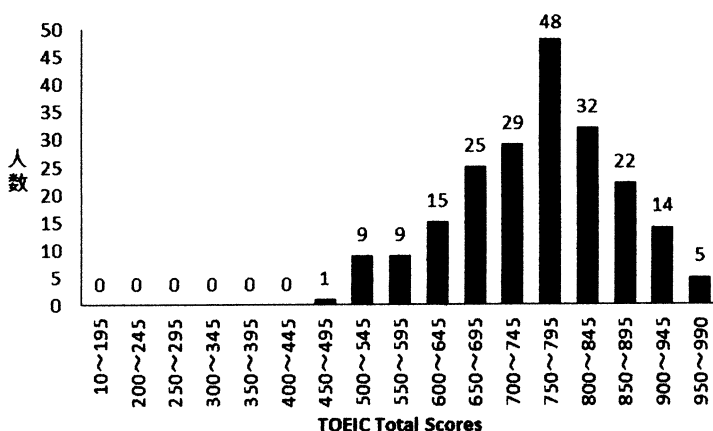


図8 4年後期の TOEIC IP 総合得点の分布 (2006年度~2008年度入学生) (N=209)

その一方で、入学当初65名 (31.1%) いた450点未満の学生が、1年後期には8名 (3.8%) にまで減少し、本学部の英語カリキュラムの核となる必修科目群が終了する2年後期には0名となっていることは注目に値する。500点未満という括りで見ると、入学当初、半数以上の111名 (53.1%) が該当していたが、4年後期には1名 (0.5%) にまで減少している。これらのデータは、得点の高いグループの学生も低いグループの学生も着実に英語力を伸ばしていることを示している。また、特に得点の低いグループの学生の伸びには、350点以下の学生と355点から400点の間の学生の一部を対象として実施してきた個別指導も貢献していると考えてよいと思われる。

4. 今後の課題

本稿では、群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部における英語教育プログラムの概要を紹介し、TOEIC IPの結果に基づいて学生の英語力の状況を分析した。3節で見たように学生の英語力が着実に伸びていることから、本学部の英語教育プログラムはおおむね成功していると考えてよいと思われるが、検討すべき課題もいくつかある。

1点目はテーマ中心のカリキュラムの深化の問題である。2節で述べた通り、現在はクラス編成方法の関係もあって、緩やかなテーマ中心のカリキュラムを採用しているが、より効率のよいカリキュラムにしていくためには、リーディングとリスニングに加えて、スピーキングとライティングとの連関を強める必要がある。また、現行では海外のESL授業で使用されている市販の教材を用いているが、テーマの中には学生の興味をあまり引かないものもいくつか含まれている。教養のある英語を身につけさせるためには、必ずしも学生の現在の関心のみに合わせて必要はないが、今後は、学生の専攻分野を考慮したテーマの精選も必要となってくるであろう。そのためには、将来的に独自教材の開発も必要となってくる。

2点目は内容教育とスキル指導との両立の問題である。リーディングとリスニングを軸としたテーマ中心のカリキュラムを採用していることで、特にこれらの技能領域で内容理解に重点が置かれ、その結果、リーディングやリスニングのスキルの系統立った教育という点でやや弱いカリキュラムになっている。どのようにして現行カリキュラムの中に、言語学習の側面、特にスキルの指導を組み込んでいくかということを今後検討する必要があるが、その際、近年提唱されている CLIL

(Content and Language Integrated Learning、内容言語統合型学習。Mehisto, Frigols and Marsh (2008)、Coyle, Hood and Marsh (2010)、笹島 (2011)、渡部・池田・和泉 (2011) など) のような内容学習と言語学習とを統合する指導法の考え方が参考になると思われる。

3点目は、3年次以降の英語力養成をどうするかという問題である。表1に見るように、本学部では3年次以上になると英語必修科目がほとんどなくなる。3年次以降の英語科目を必修にしているのは、学生それぞれの個性や関心、必要性などに応じて選択科目の中から自由に選んで履修してもらうためであるが、3年後期以降、就職活動との兼ね合いもあり英語科目の履修者が減る傾向にある。このあたりの事情が、3節で指摘した一定のレベル以上に学生を伸ばすことができているという点と関連していると推測される。可能性の1つとして、CBI、CLIL、ESP (English for Specific Purposes。寺内他 (編) (2010)、Paltridge and Starfield (eds.) (2013) など) などの考え方に基づいて、学生の専攻領域とより深く関連付けた上級学年向けの英語必修科目を開発することが考えられる。

4点目は、学生の英語力の測定に使用しているテストがTOEICに偏っている点である。本学部の英語教育の目標はTOEICのスコアアップにあるのではなく、4技能全般にわたってバランスよく学生の英語力を伸ばし、英語で書かれた／話された様々な情報（ビジネス的なものやアカデミックなものを含む）を正確に理解し、英語で情報や意見を発信できる人材を育成することにある。そのような目標を持って英語教育を行えば、その結果としてTOEICのスコアも伸びるという考え方でカリキュラムが組まれているが、現在、本学部でプレースメントと学生の英語力のモニターのために使用しているTOEIC IPテストは、リスニングとリーディングの力を見るためのものであるため、本学部で取り組んでいる英語教育の一部しか測定していないことになる。今後はTOEIC Speaking & WritingテストやTOEFL iBT®、IELTS™など、スピーキングやライティングの力も測定できるようなテストも導入することで英語力を幅広く測定し、プログラムの改善に役立てていくことが必要だと考える。

5点目は教員間のばらつきへの対応である。学生にアンケートを取ると、教員間での指導内容や指導方法のばらつきが指摘されることがある。現在は、上述のように各トラックに専任教員のトラック・コーディネーターを置き、また定期的に非常勤教員も含めた英語教員全員の打ち合わせを開催することで、カリキュラムに対する共通理解を醸成する努力はしてきているが、個々の特性や考え方の違いなどにより、実際の授業にある程度のばらつきが生じていることは否めない。教員にもそれぞれ個性があるので、まったく同じような授業を行うことは不可能であるし、また行う必要もないが、教員間のばらつきを学生が納得できる範囲内に収められるような方策も必要となろう。

本稿では2009年度から2011年度の卒業生のデータを基に本学部生の英語力の現状を見たが、これには2.7節で紹介した2010年度後期導入のHonors English Program (HP) の効果が反映されていない。履修をTOEICで800点以上取得した学生に限定することで、学部の目標としているTOEIC 730点を達成した学生の次の目標となることを意図している。HPの存在が新たな刺激となり、さらなる英語学習の励みになっているとの学生の声もあるので、稿を改めてHPの導入後の状況を報告したい。

参考文献

- Brinton, D. M. and P. Master (eds.). 1997. *New Ways in Content-Based Instruction*. Alexandria, VA: Teachers of English to Speakers of Other Languages.
- Brinton, D. M., M. A. Snow and M. B. Wesche. 1989. *Content-Based Second Language Instruction*. New York: Newbury House.

- Coyle, D., P. Hood and D. Marsh. 2010. *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 古川昭夫. 2010. 『英語多読法』東京：小学館.
- The International Phonetic Association. 1999. *Handbook of the International Phonetic Association: A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柏野健次. 2010. 『英語語法レファレンス』東京：三省堂.
- Kasper, L. F. 2000. *Content-Based College ESL Instruction*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 小池生夫他. 2010. 『企業が求める英語力』東京：朝日出版社.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. 2012. 「TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011」.
<<http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/DAA2011.pdf>>
- 久野暲, 高見健一. 2004. 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』東京：くろしお出版.
- 久野暲, 高見健一. 2007. 『謎解きの英文法 否定』東京：くろしお出版.
- Mehisto, P., M. J. Frigols and D. Marsh. 2008. *Uncovering CLIL: Content and Language Integrated Learning and Multilingual Education*. Oxford: Macmillan.
- ミントン, T. D. 1999. 『ここがおかしい日本人の英文法』東京：研究社.
- 大西泰斗, ポール・マクベイ. 2005. 『ハートで感じる英文法』東京：日本放送出版協会.
- 大西泰斗, ポール・マクベイ. 2006. 『ハートで感じる英文法 (会話編)』東京：日本放送出版協会.
- Paltridge, B. and S. Starfield (eds.). 2013. *The Handbook of English for Specific Purposes*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- ピーターセン, マーク. 1988. 『日本人の英語』東京：岩波書店.
- 酒井邦秀. 2002. 『快読100万語！ペーパーバックへの道』東京：筑摩書房.
- 酒井邦秀, 神田みなみ. 2005. 『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ』東京：大修館書店.
- 笹島茂 (編著). 2011. 『CLIL：新しい発想の授業』東京：三修社.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 寺内一, 山内ひさ子, 野口ジュディー, 笹島茂 (編). 2010. 『21世紀のESP—新しいESP 理論の構築と実践』東京：大修館書店.
- 渡部良典, 池田真, 和泉伸一. 2011. 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第1巻 原理と方法』東京：上智大学出版.